おやじ

札幌市医師会
医療法人愛全会

小森　吉夫

卒寿の宴を少々亀背腰痛進行中の糟糠の妻と健康な３人の娘夫妻と、７人の明るい孫たちに祝っていただいた。私には、“おやじ”と慕う方が二人おられる。日々の安定した生活と教育の場を与えてくれた“おやじ”庄吉と、医師としての使命を教示してくださった“おやじ”島先生である。

父、庄吉　明治25年２月岐阜県宝来で生まれ、祖父に従い明治39年３月十勝の芽室村毛根に移住した。教師になる決意と努力を重ね、大正３年北海道師範学校を卒業し、函館・旭川勤務から大正７年鹿追小学校に赴任、当時学務委員だった谷源之亟（十勝開墾の先駆者で私の妻の祖父）の協力を得て、新校舎を建設した。大正15年26歳で音更小学校校長となり、愛農・愛土・勤労の３徳性高揚のため学校で牛を飼い、牛乳は給食に充てた。従来の教書に不満を抱き『北海道農業教科書』を編集し、文部省の検定、道庁の採択を得て、全道的に使用されるようになった。その後も産業教育に情熱を注ぎ、昭和８年札幌平岸小学校が札幌師範学校の農村教育モデルスクールに指定された同校校長として赴任した。酪農と農業実習の中に教育を取り入れるという総合方式で青少年教育に当たり、昭和27年道教育文化賞を受賞した。家庭にあっては子供たちの教育に厳しく兄も姉も優秀な成績で大学・高女を卒業したが、姉が結核で死亡してからは学業より健康に留意せよと末子の私には優しかった気がする。かねがね『仏神は貴び、仏神を頼まず』と言っていたが、家には神棚もあり、正月が近づくと“しめ縄”を編み、神棚はもちろん、玄関・トイレほかの各所に飾っていたし、仏壇には小森家の過去帳を掲げ、祖父・娘の命日には仏壇の前に家族全員正座させ仏説阿弥陀経を合唱させた。夜明けと共に起床・散歩・シャワー浴後朝食を取っていた。休日には、祖父と共に畑仕事や山羊・鶏・兎の世話をし、書・囲碁・尺八を楽しんでいた。母に先立たれた晩年15年も朝散歩を続け、晴耕雨読の日々を重ね、昭和63年、私が北京のアジア農村医学会出席中、早朝兄が心筋梗塞で亡くなり、夕方入院中の父が病院で永眠された。

晩年の父

島教授　医局では寡黙・勤勉・冷静な教授で、狡（ずる）・怠慢・誤魔化しには極めて厳しい先生であったが、学会研究会での質問・指摘につまると適切な援護発言をしてくださった。昭和33年５月ご夫妻の仲人で谷美恵子と結婚式を挙げたが、披露宴では身に余るお褒めの言葉を頂き、旅行出発のわれわれを玄関までお出になり、見送ってくださった。８月、先生の父上看護のため、九州にお帰りになられたが、『留守居は小森夫妻に任せる』とのお言葉も新婚早々両親と同居のわれわれ夫妻を気遣ってのご配慮とありがたく承った。お届け物もいたみ易いものは適当に処理せよとのお言葉を真に受けて、夜ごと留守居慰問と称し襲来する医局員とビールの果てまで処理した。飼い犬のスピッツ・ダックスフントとの散歩は夫婦語らいの一時でもあった。帰宅時に頂いたオールドパーは暫時貴重なお宝としてわが家のサイドボードのお飾りとなった。北大医局と札医整形との野球、北大病院医局対抗の野球・リレー等にはいつも温かく見守り応援、終了後の反省慰労祝賀会には貴重なウイスキーを下さった。私が室蘭日鋼病院就職後、困難な症例の度に診察・手術指導に来蘭くださった。特に院長の松岡先生とは意気投合され、イタンキ浜での松岡先生との楽しげなゴルフはお手本になった。診察・手術指導後の酒席には同席を許され、楽しい一時を過ごさせていただいた。料亭では盃を重ねるにつれて、松岡先生お気に入りの芸者“小六さんとゆう”の三味線・踊りに合わせて正調黒田節ほか数々の九州民謡から始まり、最新の流行歌まで歌ってくださったことがつい先日のように思い出される。登別温泉での研究会・ゴルフ後、温泉“滝乃家”で先生の鍛えられた背中をお流しし、その上先生に広い私の背中を磨いていただいた感激は忘れられない思い出となった。洞爺湖研究会後のゴルフで新日鉄の大吉先生と一緒に２ラウンドした時、急な登りコースではキャディーの差し出すゴルフクラブにお捕まりになって進まれたのが、ご一緒できた最後のラウンドとなった。当時、私のドライバーは260ヤードほど飛ぶこともあったが『ゴルフは飛距離でなく如何にスコアを纏めるかにあるのだぞ』とのご指導を受けた。思い出尽きない恩師のご冥福を心静かにお祈り申し上げる。

ゴルフも一流だった恩師島先生